

問題文

みちのくを旅して書いた『奥の細道』があまりにも有名になったため、芭蕉ばしゅうといえは生涯を旅に（a）費やしていたというような印象を持っている人もいますが、じつのところ、彼は四十歳ぐらいになるまでさほど旅はしていません。四十歳を過ぎて、一代の*¹宗匠そうしやうとして名を立てて「芭蕉翁おう」などと呼ばれるようになってから、ほとんど住所不定といってもいいぐらい定住性を捨てて、旅から旅への人生を始めた。そして五十一歳のときに、「旅に病んで夢は枯野をかけ廻めぐる」という句を詠んで、大阪で死んだわけです。

①これは、世間的な常識では理解しにくい生き方ですね。「かわいい子には旅をさせろ」なんて言葉もあるくらいで、旅というのはふつう、若い人が経験を積む修業の場だと思われています。芭蕉のように、すでに実績を積んで名声を（b）カクリツし、弟子も大勢いて、安定した地位と生活を手に入れた大家が、わざわざ旅に出る必要はありません。どっしりと居を構えて、後進の指導にあたっていれば、何不自由のない生活が送れるんです。

☐ X 芭蕉は、そういう常識とは正反対の生き方を選びました。芸術を志す者としては、そこに創造という行為の*²秘儀ひぎが隠れていることを読み取らなければいけない。つまり芭蕉は、②不安のない日常に埋没し、定まったスタイルに安住することで、自らの創造性という扉を開くカギが錆びついてしまうことを恐れたんだと思います。

（林望『「芸術力」の磨きかた 鑑賞、そして自己表現へ』より 一部表記を変えているところがあります）

*¹宗匠…文芸にすぐれ、人に教える立場にある人。

*²秘儀…ひそかに行う儀式。

問い

問一 線部（a）～（b）について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

（a）費やして （b）カクリツ

問二 線部①「これ」とは何を指しますか。本文の言葉を使って説明しなさい。

問三 線部②「不安のない日常に埋没し、定まったスタイルに安住する」と

ありますが、あなたが「不安のない日常」や「定まったスタイル」から脱して「新しい発見」をした経験について、具体例を挙げながら説明しなさい。